

明日香村の万葉歌碑を歩く



采女の袖吹き返す明日香風
都を遠くいたづらに吹く
（大意）采女の袖を吹き返した明日香風は、都が遠くになったので、ただ空しく吹いている。
（揮毫者）犬養孝/国文学者

万葉学者であった故犬養孝は「万葉集は机上の学問ではない、詠われた頃の1300年前に時代背景を戻し、詠われた土地に立つて万葉歌を声に出して歌いましょう。万葉集は心の音楽です。」と言われました。大阪大学萬葉旅行の会をはじめ市民講座においても、犬養先生は多くの学生や一般市民とともに万葉故地を歩かれ、万葉集が詠われた時代を思い巡り、その土地の風景・自然現象・そこに吹く風を感じながら、皆さんとともに万葉集を唱和されました。犬養先生が揮毫された万葉歌碑は日本全国に141基あり、その内の15基がこの明日香村にあります。その第1号歌碑は甘樫丘の中腹にある「采女の袖吹き返す 明日香風 都を遠くいたづらに吹く」という志貴皇子の歌です。昭和42年に建立されたこの歌碑は、甘樫丘を開発の手から守るために建てられました。当時甘樫丘には今のような観光案内板も万葉植物園もありませんでした。ここに8階建てのホテルを建てるという計画が持ち上がりました。村としては何とかしてこれを阻止したいと考え、犬養先生に万葉歌碑を建てるための揮毫をお願いしました。しかし犬養先生は、自分が書いた文字が人の目に触れるところに立つのは嫌だとおっしゃいました。当時の大阪大学の教え子たちが、「犬養先生の遺稿のお祝いということで、私たちに任せてください」とお願いしたところ、犬養先生はしぶしぶ歌を揮毫されました。そして万葉歌碑が建立されたこと、甘樫丘のホテルの建設計画はなくなり、当時全国各地で、故地や豊かな自然をどうすれば開発の手から守ればいいのか、手をこまねいていたところ、明日香村では犬養先生が揮毫された万葉歌碑が、開発の防波堤となったという話が伝わって、全国から犬養先生のもとに依頼が入ってきました。犬養先生は、そういうことだったから協力しようというので、揮毫されていった結果、121基という数に至ったわけなんです。犬養先生が亡くなった後から20基が建立され、現在141基になっています。どうぞ皆さん万葉歌碑をめぐる際は、その歌碑がある場所と歌の関係、作者がどういう気持ちで書いたのか、社会情勢・季節・時間・気象など当時を思いをはせながら、声に出して歌ってみてください。時代こそ異なりますが、万葉集が今の私たちと変わらない気持ちであることがわかってくると思っています。この万葉歌碑のご案内が、日本国家創世の地「明日香」において、万葉時代を楽しまれたこときっかけになれば幸いです。



今さら多武の山霧が深いかも
細い瀬にのみ髪ける
（大意）多武の山霧が深いから、今さらか、細い瀬にのみ髪ける波が騒いでいます。
（揮毫者）吉川美恵子

皆人の命われもみ吉野の
滝の常盤の常ならぬかも
（大意）皆人の命もわたしの命も、み吉野の滝の常盤の常ならぬかも、波が騒いでいます。永久に変わらぬように。
（揮毫者）吉川美恵子

春日なごみ愛の山白の船出
遊半の飲む酒杯に影射す
（大意）春日の三笠の山に月の船が出て、風流士が飲む酒杯にその影を映して。
（揮毫者）浦田龍川/書家

君を待つ松浦の浦の娘は
常世の御天姫かも
（大意）君を待つ松浦の浦の娘は、常世の御天姫かも。
（揮毫者）松塚玲糸/書家

八釣川水底絶えず行水の
流れて行く水のように絶えず
（大意）八釣川の水底絶えず流れて行く水のように絶えず流れる。
（揮毫者）里中満智子/漫画家

いに人の事始らぬわれ見も
久しなりぬ香具山
（大意）神代の昔の事は知らないが、私が見てからだから、天の香具山は、今も久しなうた。
（揮毫者）清水公照/東大寺長老

大君は神にしませば天雲の
雷の上に降りせるかも
（大意）大君は神でいらしやるので、天雲の雷の上から降りてくると、雷丘に坂道を造っていらしやる。
（揮毫者）犬養孝/国文学者

わが家の庭に時いた花で
花に咲きなまほへ見む
（大意）わが家の庭に時いた花で、花に咲きなまほへ見む。石橋の遠いところ、見通しなど思いもよらない。
（揮毫者）不明

明日香川も渡らむ石橋の
遠き心はほほえみぬかも
（大意）明日香川を明日香の古（石橋の）遠いところ、見通しなど思いもよらない。
（揮毫者）不明

飛鳥の明日香里を置きて去は
君がかりは見ずかもあむ
（大意）飛鳥の明日香の古（石橋の）遠いところ、見通しなど思いもよらない。
（揮毫者）不明

大口の眞神の原降る雪は
いたく降りて家もあななく
（大意）大口の眞神の原に降る雪は、ひどく降りたので、家もあななく、吹いている。
（揮毫者）犬養孝/国文学者

采女の袖吹き返す明日香風
都を遠くいたづらに吹く
（大意）采女の袖を吹き返した明日香風は、都が遠くになったので、ただ空しく吹いている。
（揮毫者）平山都天/画家

山吹の立よそいなる山清水
汲みに行かぬ道の知なく
（大意）山吹が咲いている山の清水を汲みに行かぬ道の知なく、そへ行く道がわからぬ。
（揮毫者）犬養孝/国文学者

明日香川の水底の玉藻の
情は妹は待たぬかも
（大意）明日香川の水底の玉藻、情は妹は待たぬかも。
（揮毫者）犬養孝/国文学者

世間の繁き飯座に住む住
至らぬのたま知らずも
（大意）世の中という煩わしいことに住み続け、死後に行き着く浄土の様子はわからない。
（揮毫者）不明

今日も明日香の夕暮
河蝦の海を清くもめむ
（大意）今日もまた明日香川では、夕方になると、も力エルの鳴く潮がすがすがしい。
（揮毫者）犬養孝/国文学者

明日香川がらみ渡瀬が昔は
流る水のゆたかみ
（大意）明日香川にがらみ渡瀬が昔は、流る水のゆたかみ。水もゆたかりとあったらうらやましい。
（揮毫者）不明

二頭山頂上止む指巻止む
あつても止まらぬ明日香川
（大意）二頭山頂上止む指巻止む、あつても止まらぬ明日香川。明日香川は、山吹の立よそいなる山清水、汲みに行かぬ道の知なく、そへ行く道がわからぬ。
（揮毫者）不明

みどり人の守る山も
あはれ花をさへは梅は
（大意）みどり人の守る山も、あはれ花をさへは梅は。三頭山頂上止む指巻止む、あつても止まらぬ明日香川。明日香川は、山吹の立よそいなる山清水、汲みに行かぬ道の知なく、そへ行く道がわからぬ。
（揮毫者）不明

大君は神にしませば赤駒の
はばき由屋を都たてつ
（大意）大君は神でいらしやるので、赤駒が降つた田を立派な都となつた。
（揮毫者）犬養孝/国文学者

橋の寺の長屋に吾等宿し
童女散髪は髪あげつらむか
（大意）橋の寺の長屋に吾等宿し、童女散髪は髪あげつらむか。橋の寺の長屋に吾等宿し、童女散髪は髪あげつらむか。
（揮毫者）不明

立て居るもを念ふれな
赤穂打たし髪を
（大意）立て居るもを念ふれな、赤穂打たし髪を。立て居るもを念ふれな、赤穂打たし髪を。
（揮毫者）犬養孝/国文学者

さ檜隈檜隈川の瀬を速み
君の手取は言せむかも
（大意）檜隈川の瀬が速いので、あなたの手を取つたら、噂されるでしょうか。
（揮毫者）犬養孝/国文学者

嶋の宮上の池なる故鳥
荒ひな行きて君まよむ
（大意）嶋の宮上の池に、荒ひな行きて君まよむ。嶋の宮上の池に、荒ひな行きて君まよむ。
（揮毫者）犬養孝/国文学者

御食向かふ南洲の巖には
降りしはれか消え残りたる
（大意）御食向かふ南洲の巖には、降りしはれか消え残りたる。御食向かふ南洲の巖には、降りしはれか消え残りたる。
（揮毫者）不明

斎串立て神酒を奉る神主が
うすの玉鬘見ればも
（大意）斎串を立て、神酒を奉る神主の、うすの玉鬘見ればも、うすの玉鬘見ればも。
（揮毫者）不明

わが里に大雪降り大原の
古りにし里に降るまは後
（大意）わたしの里に大雪降つた。わたしの里に降るまは後、わたしの里に降るまは後。
（揮毫者）不明

大原のこの市菜原の
我思ひ心に今夜逢えぬかも
（大意）大原のこの市菜原の、我思ひ心に今夜逢えぬかも。大原のこの市菜原の、我思ひ心に今夜逢えぬかも。
（揮毫者）不明

天橋も長くも高山も
高くも月取りの
君に奉りて恋せむむほむ
（大意）天橋も長くも高山も、高くも月取りの、君に奉りて恋せむむほむ。天橋も長くも高山も、高くも月取りの、君に奉りて恋せむむほむ。
（揮毫者）不明

片岡のこの向峰に推時かば
今年の夏の日陰になる
（大意）片岡のこの向峰に推時かば、今年の夏の日陰になる。片岡のこの向峰に推時かば、今年の夏の日陰になる。
（揮毫者）不明

古に恋ならむ鳥は
けだしや鳴くわな恋る如
（大意）古に恋ならむ鳥は、けだしや鳴くわな恋る如。古に恋ならむ鳥は、けだしや鳴くわな恋る如。
（揮毫者）不明

明日香川瀬に暮れは生ひたれど
しがらみは離れ難く
（大意）明日香川の瀬に暮れは生ひたれど、しがらみは離れ難く。明日香川の瀬に暮れは生ひたれど、しがらみは離れ難く。
（揮毫者）不明

御食向かふ南洲の巖には
降りしはれか消え残りたる
（大意）御食向かふ南洲の巖には、降りしはれか消え残りたる。御食向かふ南洲の巖には、降りしはれか消え残りたる。
（揮毫者）不明

明日香川七瀬の淀に住む鳥
心あはれ波立りて
（大意）明日香川の多くの瀬に、心あはれ波立りて。明日香川の多くの瀬に、心あはれ波立りて。
（揮毫者）不明

明日香川も渡らむ石橋の
遠き心はほほえみぬかも
（大意）明日香川も渡らむ石橋の、遠き心はほほえみぬかも。明日香川も渡らむ石橋の、遠き心はほほえみぬかも。
（揮毫者）不明